

桐壺帝の抵抗・挫折・再起

——桐壺卷を帝サイドから読む——

望月郁子

一 問題提起

この小論は、文献学 (philologie) の立場での、桐壺卷の読みの試論である。『源氏物語』を、現存のかたち即ち五十四帖で、一つの文献と見、文献全体を視野に入れて、冒頭の巻の意味付けがなされなければならない。

見通しを言えば、冒頭の帝桐壺による△父亡き▽更衣一人の優遇は、周囲には異常としか理解されないが、東宮空位という政情不安を処理するための帝桐壺の抵抗であると見る。それを理解するためには、賢木卷に至って証される△前坊廃太子▽の理解が必要不可欠である。帝桐壺の抵抗は更衣の死によって挫折を余儀なくされたが、立太子問題が政争の起点とされるのを回避するために、帝は私情の総てを捨てて、第一皇子を東宮とし、第一皇子に立太子の最優先権を認めるのを原則とした。挫折のスランプを短期間で切り抜けた。再起した帝桐壺は第二皇子の処遇を決めるに当たって倭相・高麗人の観相・宿曜の占いを行なった。桐壺卷で直接語られるのは高麗人の観相であり、それを重視して、第二皇子を皇位継

承権のない「ただ人」源氏とした。先帝・母后没後、先帝の四の君藤壺を更衣に替わるべき中宮候補として入内させる。

帝桐壺の中宮候補の条件は△父が生きていない▽である。これは、外戚に立太子をほしいままにさせてはならない、廃太子から皇子達を守らなければならないと決意した帝桐壺による《極秘の条件》である。帝桐壺の政治姿勢の根底にこの《皇統の血の堅持》がある。これが『源氏物語』五十四帖の底流として一貫している（「三・四」帝桐壺の政治姿勢とその背景）。

帝桐壺にとって、残る大きな問題は、東宮朱雀に譲位する時の次期東宮をどうするかであったであろう。帝が、△ただ人▽源氏を藤壺に接近させる。帝は源氏の将来についての宿曜の予言を知っている。宿曜の予言は仏教上の天の声といふべきものであり、帝はそれを顕現化しなければならなかったのではないか。読者が桐壺巻における帝の源氏の処遇を、元服も含めて理解するためには、濡標巻に至って源氏を介して読者に知らされる△宿曜の予言▽を知らなければならぬ。若紫巻での源氏の将来についての夢の告げ、明石巻での源氏の夢に現われる故院桐壺の告げも絡んでいる。桐壺巻の終わり三分の一は、それらを含めた包括的な読みが要求される。△源氏の藤壺密通▽と言われている問題は、単なる密通で片付くことではない。帝桐壺が《絶対矛盾》を余儀なくされた問題である。

政情不安の乱世からスタートし、新秩序を立て、後世の範となる政治路線を実践しようとする帝の語りを長編物語の冒頭に据えるところに、時を《末世》と限定した上での《史》⁽⁸⁾に対する作者の志向を見るべきであろう。「いとむかしき日本」の末の世（若紫）⁽⁹⁾という北山僧都の嘆きを読み落としてはならない。

『源氏物語』は、繰り返し繰り返し読者の熟読が読者に要求される文献である。

△書く▽という作業は、書き手の意識・目的に先行される。執筆目的が解明されなければ、『源氏物語』が読めたとはならない。

二 帝桐壺の抵抗

「二一」(冒頭の異常さ) 桐壺卷の文章は弛みがない。切羽詰まった状況で、削ぎ落とせるものは全て捨象した語り口である。

「いづれの御時にか、女御、更衣あまた(アマルホド)さぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際(誰モガ認メザルヲ得ナイ、ズバヌケテ高イ身分)⁽¹⁾にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」

意外な女性が帝桐壺の愛を独占している。

周知のことであるが、当時、上流貴族は娘を入内させ、外戚をめざす。入内した女御・更衣方は帝の愛を得て男皇子を出産しなければならない。親兄弟一族の榮譽が彼女たち一人一人の肩にかかっている。帝はアマタの女御・更衣に平等に対応し、後宮の平和を保たなければならない。特定の女性一人だけを熱愛する帝桐壺は、人々の目に、尋常とは映らない。語り出しの「いづれの御時にか」には、こんな帝がいらしたであろうか、前代未聞という口吻がある。物語の冒頭にムカシがない。ムカシは、記憶に鮮明に残っている懐かしい過去、忘れられないあの時・あの人を言い、体験した過去をさす。ムカシを冠しようもない帝桐壺の異常性の語りから『源氏物語』は始められている。物語として破格な語り出しである。そこに、新しい物語に対する作者の気概がうかがえる。

「はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。おなじほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。……人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれど、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆ

くに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。」

ソネムは、身分の上の人が下の者を許せず、敵視することをいうか。⁽²⁾「おなじほど、それより下臈の更衣たち」は、当の女性が更衣であることを示す。人の忠告も「え憚らせたまはず」と、帝は当の更衣に対する態度を変えることができない。エ：ズを読み落としてはなるまい。帝はある信念にかきたてられ、使命感に支えられているかのである。更衣一人に愛を集中する帝に対し、官僚たちも、手の下し様もなく、将来の政局はどうなるのか当惑しきっており、楊貴妃の例（馬嵬に果てた）を持ち出すに違いない情況に至る。更衣は「いとはしたなきこと（トリツクシマノナイ嫌がらせ）」が多いが、帝の愛だけを頼りに宮中の生活を続けている。

「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかり後見しなければ、事とある時は、なほ抛りどころなく心細げなり。」

帝桐壺が選んだのは父亡き更衣であった。親兄弟を外戚にと願う女御・更衣たちにも、その親兄弟たちにも、桐壺帝は気の知れない帝としか映らなかったであろう。

母北の方は「いにしへの人（今デハ世間ニ忘レラレテイル、言い換えれば、かつてはその人と注目された、人）のよしあるにて：何ごとの儀式をもてなしたまひけれど」と宮廷儀式に強い女性である（ヨシアルはここではそれを指す）。後の語りであるが更衣の死後、帝の使者として母北の方を見舞う典侍や命婦と親交があったらしく、桐壺帝にしても未知の人ではなかったらしい。その母北の方にしても臨時の催し事となると、情報が入らずカバーができなかった。

「二」(更衣腹の皇子誕生・第一皇子既存・東宮空位)

「前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせた

まひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。」

更衣が「世になくきよらなる玉の」皇子を出産。更衣の立場が優位になるが、実は既に「右大臣の女御腹」の第一皇子が在り、世に「疑ひなきまうけの君（東宮候補）」とされていることが読者に明らかにされる。これは、第一皇子が在りながら東宮空位であることを疑わせる。帝桐壺が右大臣の女御腹の第一皇子の立太子を渋っているらしい。更衣腹の第二皇子の「めづらかなるちこの御容貌」が第一皇子を圧倒する。帝は「私物に思ほしかしづきたまふ（心ノ中デ聖ナルモノトシテ大切ニナサル）こと限りなし」と第二皇子に将来の期待を抱く。（この場面、物語の主人公となる皇子の産養いも乳母の選定も一切語られていない。徹底した削ぎぶりである。ちなみに産養いは宇治十帖で勾宮の嫡男（宇治八宮の孫）に至って盛大に語られる（宿木）。）

「……この皇子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきて（帝が更衣を秘蔵の皇子の母として特待する）たれば、坊にもようせずは、この皇子のゐたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり。人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう（相手ニナルノガ面倒デ）心苦しう思ひきこえさせたまひける。」

東宮空位らしい。帝・更衣と右大臣の女御との対立が立太子がらみの熾烈なものとなる情況が整う。女御の「御諫め」とは、第一皇子優先の筋論か。

「御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打ち橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、

御送りの人の衣の裾たへがたくまさなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。」

更衣の局が清涼殿から最も遠い位置に設定されている。帝に素通りされる方々が耐えかねるにせよ、後宮でまさかと思う「あやしきわざ」「まさなきこと」が出現する。ミヤビどころではない。気違い沙汰である。いじめがそこまでエスカレートすると、帝は上局にいた別の更衣に部屋を空けさせ、更衣の局を移して、この種の嫌がらせから更衣を救った。後宮は嫉妬の坩堝と化した。

「二」(更衣腹の皇子の袴着の儀)

「この皇子二つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうせさせたまふ。それにつけても世の譏りのみ多かれど……」

帝桐壺はあくまで強気である。更衣腹の皇子の袴着の儀式を第一皇子のそれにひけを取らないように盛大に行なった。それに対して「世の譏りのみ多かれど」——囂々たる批判があった——とは、人々には、△第二皇子を東宮に▽が帝の意志と読み取れたことを示唆する。外戚としての政権掌握を狙う人々に、外戚となるべき父が大納言にすぎずそれもすでに故人である更衣腹の皇子を、第一皇子をさしおいて、東宮に推すなど、非常識としか受けとめられなかった。但し彼等も、この皇子の「御容貌心ばえ」が抜群に優れているのは認めざるをえないという。

以上、物語の主人公の数え年三歳の△袴着の儀▽まで、三四年ぐらいの語りである。帝は後宮の平和など眼中にないかのように、周囲を寄せ付けず、孤立無援のただ中で、自己の意志を貫こうとしている。

三 更衣の死、帝の挫折

「三1」（更衣の死）「その年の夏」御息所の体調が急変し、「日々に重りたまひて」五六日で衰弱。

「限りあれば、さのみもとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさと言ふ方なく思はさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみなながら、言に出でも聞こえやらず、…」

帝は、宮中の「限り（死の穢れに対する禁忌）」と更衣を手離せない純粋な人間感情とのジレンマに陥る（「夜半うち過ぐるほどに」更衣絶命）。

死因を物語は正面切っては語らない。更衣の遺詠（かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり）の後半「いかまほしきは命なりけり」は、「生きていたいののは実は私の寿命なのでした」つまり、今死ぬのは寿命を尽くしての死ではないという、帝への直接の訴えではないか。遺詠に続く「いとかく思ひたまへましかば」は、弘徽殿方の策を見抜けなかったことへのくやしさである。当時の上流社会での邪魔者毒殺の史実、原子の事件を引くまでもない。物語冒頭の「楊貴妃の例もひき出でつべうなりゆく」がことの伏線であった。

更衣を「いとにほひやかに（血色ノヨイ）うつくしげなる（子供ノヨウニピチピシタ）人」という。ペイルフェイスではない。いじめに悩みはしても負けない、元気がよく気の張った若い女性であった。「いとあはれともの」を思ひしみなながら、言に出でも聞こえやらず」の「もの」が何を指すか。原子の事件では乳母に嫌疑がかけられた。問題の飲食物を更衣に勧めるように謀られた人、謀った人、その実状を指すか。更衣は事件の真相をおそらく見抜きながら、それを帝には「言に出でも聞こえやらず」と荒立てずに収めて終わった。

後の語りであるが、更衣の母北の方は、命婦（帝の使者）相手に「…よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬ

れば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。…」と横死を口に出して言う。それを承けて命婦は、「上もしかなん。…」と、北の方の「よこさまなるやう」を否定しない。

更に後、先帝の四の宮に桐壺帝が入内を勧めた時、

「母后「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と思しつづみて、すがすがしうも思し立たざりけるほどに、…」

という。これは、△桐壺更衣の死は第一皇子の母右大臣の女御によるいじめ▽が宮廷社会の通説とされていることを物語する。右大臣の女御は、恐れられながらも、帝桐壺の異常さに決着を付けた手腕家として、無視できない存在である。帝桐壺の完全敗北である。

「三二」（更衣の葬送・帝の悲嘆）

「限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、…内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり。これにつけても憎みたまふ人々多かり。…」

身分が更衣である人の葬送のきまりに従わなければならない。帝桐壺は「三位」を追贈し、葬送においても周囲の反感を煽った。一方、故人に対する敵視は「なくてぞ（人は恋しかりける）」にかわった。死亡事件の真相を帝にさえ打ち明けない更衣であった。

留意したいのは帝の意識「女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜し」である。「女御とだに」のダニは、セメテゝダケデモの意である。この一文は、帝桐壺が更衣を女御以上の地位、すなわち中宮にと心に決めていたことを意味する。これは第二皇子の立太子とセットである。今はの際の更衣を見て、「来し方行く末思しめされず、よろづのことを泣く泣く契

りのたまはすれど」の契りにはこれが入っていたにちがいない。更衣の人柄もさることながら、父亡き更衣を抜擢したところに、△帝による政治▽に対する外戚の介入の排除に撤しようとする帝桐壺の政治姿勢（後述）を読み取らなければならぬ。これは同時に第一皇子の母女御と女御の父右大臣が、帝桐壺からすれば、許せない、したたかな存在であることでもある。更衣の死は、帝桐壺にとって、最愛の女性を失っただけではない。理想のかたちとして、周囲の理解を求めえないのを承知で、押し進めてきた将来構想の軸とでもいうべきものが更衣の死によって破壊されたのである。帝の喪失感・挫折感・敗北感は想像にあまりある。

「…ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。…一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつありさまを聞こしめす。」

帝の悲嘆と孤独である。以下、「野分きだちて」で始まる鞍負命婦の母北の方邸訪問部分と、宮中で一人その帰りを待つ帝の孤独が長恨歌に託して語られる。

孤独な帝は若君の帰参を求める。母北の方が若宮を手放す時がいよいよ迫ってきた。命婦を引き止めて、亡夫大納言の遺言、入内を回顧する。この部分、帝が△父親が故人▽であることを承知で入内させていることに注意。続けて、「よこさまなるやうにて（前述）」の死を嘆く。命婦は、

「上もしかなん。…世にいささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち棄てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむとうちかへしつつ、御しほたれがちにおはします」と語りて尽きせず。」

「かたくなになりはつる」は誰も何も受け付けることのできない帝の孤独の自覚である。

命婦帰参。待っていた帝は北の方の返事を読んで、

「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿くところ思ひ念ぜめなどのたまはす。」

この時点では、帝は第二皇子の立太子を諦めきれてはいないらしい。⁽³⁾

物語は帝の心境を『長恨歌』の詩句に託して語る（詳細略）。

「まどろませたまふことかたし。」「朝政は怠らせたまひぬべかめり」「ものなどもきこしめさず」と、不眠・仕事への意欲喪失・食欲不振の帝を側近たちは、

「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことをも思し棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。」

となる。「道理をも失はせたまひ」は、一の宮をさしおいて二の宮を立てようとする帝に対する批判。「他の朝廷の例」とは『長恨歌伝』のいう仙界の楊貴妃による玄宗皇帝の死の予言か。⁽⁴⁾

桐壺卷の三分の一の紙幅が「野分だちて、にはかに肌寒き夕暮」の一夜とその後帝の挫折・喪心の語りに費やされている。亡き更衣の鎮魂歌と言われるが、より大切なのは帝の受けた衝撃の深さではなかったか。

「三三」（第一皇子立太子）

「明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど限りこそありけれ」と世人も聞こえ、女御も御心落ちるたまひぬ。」

これは、第一皇子に最優先権を認めるという、桐壺の示した立太子の原則である。帝桐壺がふっきれた。第一皇子の母とその父が帝にとっていかに許せない人であろうと、第二皇子がいかに抜群の才能であろうと、その母への帝の愛がいかに深かろうと、立太子そのものを政争の起点としないために、帝桐壺が決断した現実対応である。そうすることによってこそ、第二皇子の命を守ることができる。第一皇子の母女御と父右大臣とに対しては、帝が政治の実権を握って牛耳ろう。強靱不屈な帝桐壺である。

なお、「坊定まりたまふ」は、それまで東宮が空位であったことを示唆する。

「三4」（帝桐壺の政治姿勢とその背景）桐壺巻の上述の範囲で、留意したいのは、

- ① 東宮空位であったこと
- ② 帝が優遇する女性の父が故人であること

の二つである。この二つを物語全体を視野に入れて捉えておきたい。

（①東宮空位であることについて）『源氏物語』冒頭で東宮が空位であるといえ、**「前坊」**の存在が浮かび上がってくる。

「前坊」の物語への登場は、

「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君斎宮にゐたまひにしかば（葵）」
である。

「前坊」とは、字面からすれば、**△前坊（前の東宮）▽**であるが、現実には**前の東宮はミカドと称される。「前坊」**とは、**当人の最高の位が東宮であった人物、言い換えれば、△東宮になったが帝にならなかった方▽**の呼称である。これには、**東宮在位中死亡の場合と、東宮からおろされた即ち廃太子の場合とがある。**

『源氏物語』は東宮空位時代から始まる。当該の前坊が在位中死亡か、おろされたかは、彼が物語り中に生存していたか

否かが決め手となる。それを証すのは、姫君斎宮の年令である。賢木巻の△別れの櫛の儀▽に、

「斎宮は十四にぞなりたまひける。」

とある。前坊は斎宮が懷妊された時（十四五年前、源氏八九歳）までは生存していたとなる。物語り中に生存している以上、前坊は廃太子と見なければならぬ。⁽⁶⁾ 桐壺巻の第一皇子立太子は源氏四歳である。時に前坊は生きていた。

生存中の前坊を物語は一言も語らない。読者は賢木巻まで読み進んで、桐壺巻の理解に欠かせない物語り上のこの事実（前坊廃太子）を突き付けられて、自分の読みの吟味反省を迫られる。このことは、『源氏物語』が、絵を見ながら語りをする。これは、△物語▽と称しながら、その冒頭にムカシを冠しない事実とも通じ合う。繰り返し目で読み、熟読を要求する、新しい散文文学作品の誕生である。

帝桐壺にとって前坊は「…同じき御はらからといふ中にも、いみじく思ひかはしきこえさせたまひて…（葵）」と同母の気の合った弟であった。

帝桐壺は、自分が天皇、弟が東宮という当時の基本的なパターンで出発したらしい。それが物語の冒頭では東宮空位となっている。

前坊廃太子の真相も物語は語らない。推測の域を出ることはできないが、桐壺が朱雀に譲位後も政治の実権を握っていたことから推せば、先帝も同様であった可能性は在り得る。先帝の皇子（兵部卿宮）は立太子できなかった。先帝を右大臣勢力が利用して、帝桐壺の頭越しに、前坊の廃太子が断行されたのではなかったか。時期は右大臣の女御の第一皇子出産直後か。右大臣の娘の女御は帝桐壺の熱愛する更衣を亡きものにするのに手段を選ばず徹底して恥じなかった。女御の妹四の君は夕顔に亡き父三位中将の屋敷に住めない程の脅しをかけた末、夕顔は死んだ（某の院のものの怪の正体は四の

君系か)。紫の姫君の母は、兵部卿宮の北の方の圧力に負けて死んだ。その死に様を北山の僧都は、「もとの北の方やむごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし（若紫）。」と源氏に語る。兵部卿宮の北の方に、右大臣・女御の血が感じられてならない。^①桐壺帝の第一皇子が立太子しても、兵部卿宮が立太子しても、右大臣にとっては外戚への道であったのではないか。証明は困難であるが、右大臣が先帝をそそのかした可能性は十分考え得る。

帝桐壺の頭越しに断行された前坊の廃太子により、兄（天皇）・弟（東宮）のコンビによる政治構想の夢が打破された。帝でありながら桐壺は、弟を救うことはできない。日本の歴史を見る時に、平安時代政争の起点は東宮職にあったという。その政争で最も犠牲を強いられるのは天皇や東宮に立てずに終わる皇子達である（物語は冷泉廃太子の動きの中で担がれただけで終わった宇治八宮のきびしい生を宇治十帖に至って語る）。帝桐壺は弟前坊の廃太子を体験し、弟の犠牲を繰り返してはいけない、外戚としての政権掌握を狙う有力貴族に立太子を操られてはならない、帝として皇統の血筋を守らなければならないと肝に銘じたにちがいない。怒りのおさめようがなかったであろう。

桐壺巻冒頭から見てきた、帝桐壺の周辺有力貴族を眼中におかない独走・抵抗は、前坊廃太子事件の事後処理に立ち向かう帝桐壺の信念・使命感に裏付けされたものと見るのが妥当であろう。ことの筋を尊重する帝桐壺が第一皇子が在りながら東宮空位を続けたのは、まずは廃太子を断行した側を優位に立たすことが許せなかったからであろう。第一皇子自身に責任はないにせよ、兵部卿宮とのバランスもある。帝桐壺は、事後処理の道は、廃太子事件に一切関わりを持ち得ない新しい東宮候補を得、その母を中宮にするほかないと判断し、物語り冒頭が語る通りそれを実践した。第二皇子を得たが、母更衣を奪われ、それも挫折に追い込まれた。

物語冒頭の帝桐壺の、一見異状な、周囲の上流貴族に通じない行為は、上述のように捉えれば、理解し易くなるのでは

ないか。

(②父亡き姫君の帝による優遇について) あまたの女御更衣の中で、帝桐壺が特別優遇したのは、大納言の姫君であり、その入内は父の死後であった。上流貴族が娘を入内させ、皇子誕生を祈り、外戚として政権掌握を目指すのが一般的であった当時、これはかなり異例となる。父亡き姫君をなぜ帝桐壺が求めたかが問題である。

前述したが、外戚としての政権掌握を狙う有力貴族に立太子を操られてはならない。帝として皇統の血筋を守るにはどうすべきか。その為の確実な方法として帝桐壺が特定したのは、中宮となるべき女性は父・兄弟が生存していない▽を第一条件とすることではなかったか。これは同時に、外戚となる可能性のある親兄弟を身内に持つ女御・更衣を、中宮候補としては、帝は徹底回避しなければならないとなる。これは《極秘の条件》でなければならない。これを実践したのが、故大納言の姫君(桐壺更衣)の入内とその破格の優遇であった。

さらに、そのつもりで、『源氏物語』全体を見ると、中宮となる女性に帝桐壺の決めたこの《極秘の条件》が当てはまる。まず、桐壺の中宮藤壺は、先帝の四の君であり、先帝・母后没後、故更衣に似ていると典侍が帝に勧めて入内。藤壺腹の皇子冷泉を後継者として、帝桐壺は自分の政治路線を、△桐壺第一皇子朱雀帝(兄)・冷泉東宮(弟)▽のかたちで将来に繋ぐ。(朱雀帝の時代、右大臣勢力による冷泉廃太子の動きがあったが、実現には至らなかった。)

次に冷泉の中宮秋好は他ならぬ前坊の姫君。前坊も母六条御息所も没後、源氏が藤壺と計って冷泉中宮とした。これは、源氏と藤壺とによる、帝桐壺の《極秘の条件》の継承である。(冷泉帝・朱雀第一皇子東宮のコンビ)

今上(朱雀第一皇子、前東宮)の中宮明石には父光がいるが、紫の死を契機に光は出家する。病というでもない。これを、帝桐壺の《極秘の条件》を全うするための、光自身による政界からの徹底した引退と解釈したい。物語が光の死を語らないのは、この引退即ち政治家光の死としているからであろう。先例的なものに明石入道の生き方がある。

宇治十帖に至ると、立太子が決まっている匂宮は、一生の伴侶として故宇治八宮の中君を自分で選び、将来を契った⁽⁵⁾。中宮秋好は前坊の、匂宮の中君は宇治八宮のと、二人とも立太子問題の犠牲者の姫君である。犠牲とされた二人の皇子の血が、各々姫君を介して皇統の直系に継承される道が拓かれている。光の血も明石中宮を介して継承される。更に、先帝の血も藤壺を介して冷泉に継承された。帝桐壺の定めた《極秘の条件》は、このように、立太子問題の犠牲者の血（遺伝子）を救う道でもあった。

今上が譲位後、匂宮を東宮にということは、帝（一の宮）・東宮（三の宮）という兄弟の連携のかたちを今上が理想としていることを意味し、帝（桐壺）・東宮（前坊）のかたちに対応することになる。物語は、天皇兄弟のコンビによる政治構想が破壊されたところから始まり、帝王四代を経て、破壊以前のかたち再現の計画成立で終わっている。帝桐壺は、八立太子の最優先権を第一皇子にVを原則とし、それを実践して挫折から立直った。以後、物語の中でこの原則は厳守されている。

帝桐壺が構想し実践の第一歩を踏み出し、光源氏・藤壺中宮・明石中宮・匂宮に継承された《皇統の血の堅持》の中でこそ、天皇・東宮兄弟による政治実現への道が開かれる。『源氏物語』五十四帖の底に《皇統の血の堅持》が一貫して流れている。

四 再起した帝桐壺

「四一」（第二皇子の処遇）第一皇子の立太子（前述「三三」）に落胆した祖母北の方は、第二皇子六歳の年に死亡。以後、第二皇子は専ら帝桐壺のもとで暮らす。

七歳で読書始め。漢詩・漢文の学問にも、琴笛といった楽にも抜群の才能を発揮する。

帝はこの皇子の将来を決めるのに親相に頼った。高麗の相人は、

「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」

と言う。これは、それ以前に帝が行なった倭相、△宿曜△の占いの筋と合致した。帝は、第二皇子を、皇位継承権のある△親王△にせず、「ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめること」と判断し、源氏にすることにした。

〔四2〕（藤壺の入内）。中宮適任候補者をどうするか、がある。先帝の四の君が桐壺の求める中宮の条件にかなっていた（前述〔三4〕）。「これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば」と、後宮の平和は保たれる。物語は、「思しまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。」と、帝桐壺の心境を語る。

〔四3〕（帝の源氏の育て方―元服以前―）賜姓源氏・藤壺入内以前に、

「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。：御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに誰も誰も思ひきこえたまへり。」

である。父の御供とはいえ、子供時代に女御更衣方をじかに見るのが、男の子に何を与えるのか。女性との付き合い方のうちのなにかを、父を通して自然に知ることか。母が生きていれば自然に判ることを、判らせておこうという父帝の配慮でもあろうが、父の女御・更衣の一人一人を聡明な子供が、子供なりに理解し、後宮事情に強くなる。かなり特殊な対女性教育である。秘蔵っ子を自分の傍に置かないと安心できない帝でもある。

藤壺入内後、父の御供で源氏は藤壺を「おのづから漏り見たてまつる。」

源氏が藤壺に亡き母の面影を求めるやうにしむけたのは、藤壺を帝に紹介した典侍であった。

「母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。」

典侍の「いとよう似たまへり」を、顔かたちとるのが普通であるが、桐壺更衣と藤壺との間に血縁を求めるのはむずかしい。他人の空似が存在しないとは言えないが、別の解釈の可能性を求めると、更衣と藤壺とが共通するのは、桐壺が要求する入内の《極秘の条件》（前述「三4」）即ち、外戚となるべき父・兄弟が生存していないことと二人とも若いことである。典侍の「いとよう似たまへり」を入内事情とすれば、故更衣の入内にも典侍が一役買っていた可能性があるとなる。典侍は帝桐壺の《極秘の条件》を知らされていたに違いない。典侍は源氏に藤壺への接近を期待している。おそらく帝の意を承けてのことであろう。

「上も、限りなき御思ひどちにて、「（藤壺に）な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば（話シテ信ジコマセナサルノデ）（共に聞いている源氏の）幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。」

源氏と藤壺は帝の勧めに従って、母と子に準じた二人となる。これに続けて物語は、

「世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮（東宮）の御容貌にも、なほにははしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮ときこゆ。」

世の人が源氏と藤壺とを並べて、「光る君・かかやく日の宮」と称し、二人に敬意を寄せた。

「四4」（光の元服） 光十二歳で元服。帝は、

「居立ち思しいとなみて、限りあることに事を添へさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしかりし御ひびきにおとさせたまはず。所どころの饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞと、とりわき仰せ言ありてきよらを尽くして仕うまつれり。」

場所を清涼殿とする他は、東宮の元服と対等である。個人感情で「限り」以上のことを光のためにする帝桐壺ではあるまい。帝だけが知る光の将来の予言を踏まえての帝の対応ではなかったか。高麗人の観相（前述「四1」）の他に倭相と宿曜の占いがあった。△宿曜▽については、後の語りであるが、明石姫君誕生を知った源氏が

「宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。（潯標卷）」

と喜ぶ。「勘へ申したりし」ことを源氏が何時知ったのかは明らかでない。△宿曜▽は、仏教上の天の声ともいうべきものである。第二皇子の将来は天の声の顕現化でなければならぬ。賜姓源氏の決断の際も宿曜の予言が帝桐壺の念頭から離れなかったであろう。源氏の元服は、「帝、后かならず並びて生まれたまふべし」と宿曜の予言する皇子の元服でなければならない。帝桐壺は、将来の△帝、后の父▽に相応しく可能な限り盛大に行った。帝の真意は世人に通じるべくもないが、帝の意向が尊重されるところまで政情は安定している。

「…いときよらなる御髪をそぐほど心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと思し出づるに、たへがたきを心づよく念じかへさせたまふ。」

かうぶりしたまひて、御休所にまかでたまひて、御衣奉りかへて、下りて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝、はた、ましてえ忍びあへたまはず、思しまぎるるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しく思さる。

…」

帝の心中に去来する「昔のこと」とは、廢太子事件の事後処理の最善の策実現を目指しての苦しかった抵抗を指す。―事件後生まれたこの皇子の立太子が実現できていれば宿曜の予言に矛盾なく従えるのに…、母更衣が生存していさえすれば…であったであろう。帝は涙を「心づよく念じかへ」し、「皆人涙落としたまふ」を見て、「ましてえ忍びあへたまはず」である。「皆人」の涙は、元服した源氏に「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相」の顕現を認めて、源氏を惜しむ涙であろう。帝の苦悩にはほど遠い。

（源氏の結婚）

「引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。」

帝は左大臣の申し出を承知し、源氏は左大臣の婿となる。正妻となった葵上は四歳年上で「似げなく恥づかしと思いたり。」と満たされない（〈ただ人〉に不満か）。

源氏を迎えた左大臣に対し、右大臣は四の君を左大臣の宮腹の藏人少将にあわせる。

〔四五〕（元服後の源氏に対する帝のリード）

「源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすくも里住みもえしたまはず。心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しまでぞおはしける。」

大人になりたまひて後は、ありしやうに、御簾の内にも入れたまはず、御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、

ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二日三日など、絶え絶えにまかだたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづききこえたまふ。…」

結婚した息子に夫婦生活を大切にさせるのが普通の親であろうが、帝は源氏を常に傍におく。子供の時から父の女御更衣を見てきた源氏には、藤壺のすばらしさが判る。結婚した相手の葵は気に入らない。藤壺は元服後、源氏を御簾の内に入れないが、帝は藤壺に琴を弾かせ、源氏に笛を吹かせる。二人は「琴笛の音に聞こえ通ひ」、源氏は「ほのかなる御声を慰め」とする。留意すべきは帝が二人の仲を結んでいることである。

思うに、帝桐壺にとって残る最大の問題は、現東宮（第一皇子）に譲位する際に、誰を次期東宮に立てるかであったであろう。中宮候補の藤壺に皇子がなければならぬ。皇子の「御後見」を源氏がする。そのつもりで源氏を育てているが表向きであるが、帝の頭には、宿曜の占いの「…帝、后かならず並びて生まれたまふべし。…」がある。△ただ人▽源氏の子を帝にするにはどうすべきか。源氏を父とする藤壺の子を帝桐壺の子として帝桐壺が次期東宮に立てる以外に道はあるまい。帝が藤壺と源氏との仲を結ぶ底に、帝の、宿曜の予言に導かれての決意と覚悟があったと見なければならぬ。ただ人の子を帝の子とする《絶対矛盾》を背負うのが、源氏の父としての帝の責任と自負しなければ、できることではあるまい。従来、源氏と藤壺との△密通▽と言われてきた事は、△密通▽で片付く問題ではない。まさに《末世》である。

源氏は、藤壺懐妊三月の頃

「中将の君（源氏）も、おどろおどろしうさまことなる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。」その中に違い目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて…（若紫）

ということがあった。懐妊を自覚した藤壺・奏上を承けた帝・夢の告げを得た源氏三者の内面が三つ巴に描かれる部分で

ある。「及びなう思しもかけぬ筋のこと」とは、源氏が帝の実父となることを言うか。「及びなう思しもかけぬ」は、この夢の時点で、△宿曜▽の占いの結果を源氏は知らなかったことを示す。夢でその告げを承けたのは、藤壺の源氏の子懐妊は天の声に従った行為で是認されるべきものであることを示唆する。「違い目」云々はことの《絶対矛盾》がそのままでは済まないことの予言である。

明石巻で天変の中、源氏の夢に現われた故院桐壺は、

「……これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」

と言って立ち去った。源氏に「犯しありければ」と言うことは、「犯し」が源氏に通じる事柄であることを示唆する。宿曜の予言を守るための《絶対矛盾》の「罪」の償いをしたと源氏に知らせたい故院である。冷泉即位に必要な不可欠な帝桐壺の償いであった。

桐壺巻にもどる。やがて、帝は、母更衣の住んだ淑景舎を源氏の曹司とし、更衣の里の殿を立派に改築して源氏に与えた。これは、帝が源氏を手元から離して独立させてよいと思うに至った結果である。源氏は

「かかる所に、思ふやうなる人を据ゑて住まばやとのみ、嘆かしう思しわたる。」

藤壺は内住みである。実現不可能な夢を追う源氏の苦しみが始まる。

明石巻・若紫巻と後の語りにまで及んだが、そこに至る帝のリードがレールとして桐壺巻の終わり部分で敷かれているのを読み落としてはならない。

〔四六〕（「光る君」の命名者）桐壺巻の巻末は

「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ。」
で結ばれている。漢語「光」とヒカルとのずれに一言しておきたい。

テル・カカヤクは△日（太陽）▽をいうのに対し、ヒカルは△月▽をいうのが支配的である（万葉集の「高ヒカル日の御子」のヒカルは漢語「光」の意識が強い）。世人が「光る君・かかやく日の宮」と言い出したのは賜姓源氏以降である。△日▽即ち帝の中宮候補として女御更衣に君臨する藤壺を「かかやく日の宮」といい、△日嗣▽即ち東宮になれない優れた皇子、立太子の犠牲者を△月▽にたとえて「ひかる君」と、二人を区別して讃えた。『源氏物語』は△月▽を主人公とする△日嗣▽の物語ともいえる。ところで、月と直結する「ひかる君」の命名者はとなると、帝桐壺の源氏に対する真意——東宮にできないのが惜しい——を共有する上流貴族達には抵抗が大きすぎる。漢語「光」だけで（ヒカルは意識せず）命名できるのは高麗人である。命名者を高麗人とするにより、漢語「光」を表に出し、ヒカル即ち△月▽の隠れ蓑とする作者の工夫である。

〔注〕

- (1) キハが表す身分は、上下両極端の身分に限られる。
- (2) 阿久津美砂「源氏物語における「ねたむ」と「そねむ」」平成十二年度二松学舎大学卒業論文
- (3) 『完訳日本の古典』脚注「立坊をかんがえているか。」
- (4) 『長恨歌傳』（陳鴻撰）『長恨歌序』『長恨歌』がセットである。今、『和刻本漢詩集成第十輯』所収による。）によれば、楊貴妃は方士に別れる際に「太上皇モ亦タ不ジ久カラ人間ウキヨニ」と言い、玄宗は「其ノ年ノ夏ナツ四月ウツキ南宮ニ晏駕アンカシ玉フ」という。
- (5) 望月郁子「大君の死と中君の結婚」二松学舎大学人文論叢第六十一輯一九九八年十月
- (6) 望月郁子「前坊廢太子」二松学舎大学人文論叢第六十三輯一九九九年十月

(7) 兵部卿宮の北の方は、右大臣の二の君か。三女は帥宮の北の方、四女は頭中將の北の方である(花宴)。右大臣が長女を東宮時代の桐壺に、次女を先帝の一宮(兵部卿宮)に参らせ、外戚の可能性に二またをかけるのは、ありそうなことである。ちなみに、兵部卿宮と北の方の女が髭黒のもとの北の方である。

(8) 望月郁子「女人往生への道——明石中宮の役割と浮舟の受難——」大学院紀要二松15 二〇〇一年三月の(二一)